

# 東円寺跡発掘調査概要報告書・XI



平成15年3月

熊取町教育委員会

## はしがき

古くから熊取野とよばれた本町城は現在まで変わることなく「熊取」として独立した地域を保持してきた町であります。

町内には重要文化財の中家住宅や降井家書院など江戸時代初期頃の文化財がありますが、他に43ヵ所を数える埋蔵文化財包蔵地があり、貴重な遺構や遺物が埋蔵されています。

熊取町教育委員会は皆様の御協力と御理解を得ながら、毎年50件程の緊急発掘調査を実施しています。この十数年埋蔵文化財発掘調査を実施し続けて多くの資料を得てきました。

本書は平成14年度に熊取町野田における住宅地開発工事に伴って実施した発掘調査の報告書として作成したものです。今後多方面の研究に役立てられることを願っています。

最後になりましたが、本年現地での発掘調査にあたって御協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に対しましてここで厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

熊取町教育委員会

教育長職務代理者 川畑 修孝

## 例　　言

1. 本書は、平成14年度に熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係が実施した東円寺跡発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳を担当者として、平成14年6月3日に着手し、平成14年6月17日をもって終了した。  
調査では、調査区をカラーリバーサルフィルムと白黒フィルムで撮影し、平板で調査区位置図（平面図）を作成、調査区壁面図を作成し、記録にとどめた。
3. 本書における図面の標高は、T.P.（東京湾平均潮位）を用いた。また方位は、地図以外については磁北を示すこととした。
4. 本書における図面の上色は、「新版標準土色帖」第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
5. 本書の作成及び発掘現場での作業にあたって、下記の調査員・調査補助員・作業員の参加を得た。  
関井澄子、永橋祥之、前田公子、森田享子、山本恵子  
宇沢克之、太田敏治、平阪博司
6. 本発掘調査はイズミ不動住販（株）の100%出資による発掘調査である。貴社には記して謝意を表すものである。
7. 発掘調査現場で使用した機械類は、竹口文化財の提供による。
8. 本書の執筆は熊取町教育委員会生涯学習推進課文化財係考古学技師前川淳が行った。

# 目 次

## 第1章 はじめに

第1節 熊取町の地理的環境	1
第2節 熊取町の歴史的環境	1
第3節 周知の遺跡	2

## 第2章 調査の概要

第1節 東円寺跡について	4
第2節 調査の契機	5

## 第3章 東円寺跡02—2区の調査

第1節 層序	5
第2節 遺構	6
第3節 遺物	10

## 第4章 まとめ

14

# 第1章 はじめに

## 第1節 熊取町の地理的環境



熊取町の位置

熊取町は大阪府泉南地域の中央に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと南北に長い木の葉状を呈している。町域の総面積は約17.19km<sup>2</sup>を有する。地形による面積比を見ると、山地41%、丘陵24%、段丘23%、低地12%に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約3分の2を占めている。地域別に見ると、町南部においては、泉南地域の基本山地の和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている。また北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。町域に水源を持つ河川は雨山川・和田川・大井出川・見出川の4水系が存在している。いずれも町南部の山間部を水源としており南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を経て大阪湾に注ぎ込んでいる。本町が瀬戸内式気候区の東端に位置しているために年間降水量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの灌漑用の溜め池を目にすることが出来る。

## 第2節 熊取町の歴史的環境

町内の遺跡は現在43ヵ所を数える。調査で発見された遺構と代表的な遺物について時代毎に簡単に説明する。

縄文時代以前の遺構は発見されていないが、東円寺跡の所在する熊取町野田の町立中央小学校で縄文時代早期の有舌尖頭器と石鏃が検出されているので、東円寺跡は縄文時代からの複合遺跡である。

弥生時代の遺跡も発見されていない。JR熊取駅のある大久保における駅前整備事業に伴う平成元年の発掘調査では畿内第V様式を示す土器が大量に検出され大久保E遺跡となったが、その上器は古墳時代初頭の所産と考えられている。

古墳時代の遺跡は、初期の大久保E遺跡以外知られていない。ただし遺構は溝以外には検出されていない。

飛鳥時代については、平成10年度の久保城跡98-1区の調査で複数の溝が検出され、その中から飛鳥V様式といわれる土師器や須恵器が出土した。

奈良時代についてはこれまで東円寺跡87-1区の調査で建物4棟と土壙、須恵器、土師器が検出されたのみにとどまっていたが、平成11年7月熊取町七山で西暦750年以降の奈良時代を示す多くの須恵器が宅地開発の発掘調査で検出され、熊取町第41番目の「七山東遺跡」となった。

平安時代については、野田の熊取町役場付近に想定されている東円寺の創建が、発掘調査で発見された蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の比較考察から平安時代末とされている。また平成8年度には大久保から紺屋にかけての私立病院の発掘調査で黒色土器や須恵器、土師器が遺構内

から検出されている。

**鎌倉時代**に関しては、熊取町内の遺跡のほとんどが同時代を中心とした様相を示している。野田の東円寺跡、久保の久保城跡、大浦の大浦遺跡、紺屋の紺屋遺跡、七山の七山東遺跡では瓦器を豊富に含む包含層が存在しており、建物・溝といった遺構も検出されている。

**室町時代**の包含層は町全域で検出される。重要文化財に指定されている和田の来迎寺の調査では戦国期の多数の土師器皿と瓦片が出土している。また小垣内西遺跡では15世紀末から16世紀に熊取を支配した細川氏被官の行松氏居館の一部とみられる遺構が検出されている。

**江戸時代**の遺構としては、五門の重要文化財中家住宅と大久保の重要文化財降井家住宅で多数の陶磁器や瓦の他、多くの溝跡・土壙が検出されている。

### 周知の遺跡一覧表

#### 第3節 周知の遺跡

#### 熊取町埋蔵文化財包蔵地一覧

番号	遺跡名	種類	時代	地目	立地	面積	主な成果等	
1	降井家古院跡	建造物	室町～江戸	宅地	平地	4,000m <sup>2</sup>	国指定重要文化財	
2	中家住宅	宅地遺跡	室町～江戸	宅地	平地	4,500m <sup>2</sup>	重文・江戸期から明治頃の陶磁器等出土	
3	米来寺本堂跡	寺院跡	倉吉	宅地	丘陵腹	3,100m <sup>2</sup>	重文・15～16世紀の陶磁器・土師器等検出	
4	池ノ谷遺跡	散布地	山田	石畠	水田	62,300m <sup>2</sup>		
5	甲田家住宅	建造物	江戸	宅地	平地	5,000m <sup>2</sup>		
6	東円寺跡	寺院跡	紺屋～江戸	宅地	平地	310,000m <sup>2</sup>	紺屋～江戸の復号遺跡。寺院は不明	
7	城ノ下遺跡	城郭跡	空	町	宅地	丘陵	61,800m <sup>2</sup>	
8	成合寺遺跡	墓	地	空	地	丘陵腹	69,000m <sup>2</sup>	
9	高城寺城跡	城郭跡	宇	町	山林	山頂	14世紀代の600基以上の土塁墓群等検出	
10	山城跡	城郭跡	篠山	村	山林	山頂	45,300m <sup>2</sup>	
11	五門道跡	散在地	古墳～江戸	宅地	丘陵	2,300m <sup>2</sup>	月見ノ亭・馬場・千賀殿の地名が残る	
12	五門北古墳	古墳	古	墳	宅地	丘陵	1,900m <sup>2</sup>	
13	五門古墳	古墳	古	墳	宅地	丘陵	1,500m <sup>2</sup>	
14	大浦中世墓地	墓地	室	町	墓地	平地	18,400m <sup>2</sup>	
15	久保城跡	城郭跡	紺屋	倉	木本	半地	86,300m <sup>2</sup>	
16	山ノ下城跡	城郭跡	紺屋	倉	食	宅地	半地	6,800m <sup>2</sup>
17	大谷池遺跡	散在地	古墳～江戸	池	半地	51,400m <sup>2</sup>		
18	祭礼御旅所跡	祭礼跡	室	町	山林	丘陵	6,300m <sup>2</sup>	
19	正法寺跡	寺院跡	紺屋	食	宅地	丘陵	55,000m <sup>2</sup>	
20	小垣内遺跡	寺院跡	江戸	道路	丘陵	7,000m <sup>2</sup>	尾列門跡。現在消滅	
21	金剛法寺跡	寺院跡	室	町	宅地	半地	5,100m <sup>2</sup>	
22	鳥利野城跡	城郭跡	室	町	山林	丘陵	72,600m <sup>2</sup>	
23	菊ノ谷遺跡	寺院跡	室	町	山林	丘陵腹	32,000m <sup>2</sup>	
24	花成寺跡	寺院跡	室	町	山林	丘陵	28,000m <sup>2</sup>	
25	降井家堅敷跡	堅敷跡	室町～江戸	宅地	平地	12,000m <sup>2</sup>	丘陵地を区画する溝や近世の陶磁器等出土	
26	大久保A遺跡	散在地	江戸	戸	宅地	平地	8,100m <sup>2</sup>	
27	下高田遺跡	条里跡	紺屋	倉	田	平地	5,700m <sup>2</sup>	
28	大久保B遺跡	集落跡	外生～江戸	宅地	平地	47,800m <sup>2</sup>	外生末～古墳初期の遺物	
29	紺屋遺跡	散在地	古墳～江戸	宅地	平地	22,400m <sup>2</sup>	奈良末～平安期の河川跡検出	
30	白地谷遺跡	散在地	室町～江戸	戸	谷	129,600m <sup>2</sup>		
31	大久保C遺跡	散在地	室町～江戸	宅地	平地	4,500m <sup>2</sup>		
32	千石城跡	城郭跡	室	町	山林	丘陵	1,000m <sup>2</sup>	
33	口無池遺跡	散在地	平安～江戸	宅地	平地	11,200m <sup>2</sup>	天正年間(1573～92)の雜賀衆徒の城跡	
34	大久保D遺跡	散在地	紺倉～江戸	宅地	平地	9,200m <sup>2</sup>	平安末～鎌倉初期の遺構、遺物	
35	大油道跡	散在地	紺倉～江戸	山	平地	4,900m <sup>2</sup>	13～14世紀の瓦器等検出	
36	久保A遺跡	散在地	紺倉～江戸	宅地	平地	4,400m <sup>2</sup>	建物跡、8～14世紀の土器	
37	久保E遺跡	集落跡	外生～江戸	宅地	平地	2,900m <sup>2</sup>	外生末～古墳初期の遺物多数	
38	久保B遺跡	集落跡	紺倉～江戸	宅地	平地	5,000m <sup>2</sup>	13～14世紀の瓦器等検出	
39	中家生田側遺跡	集落跡	室町～江戸	宅地	平地	21,300m <sup>2</sup>	近世の陶磁器多数	
40	朝代北遺跡	散在地	紺倉～江戸	宅地	平地	60,000m <sup>2</sup>	13～14世紀の瓦器等検出	
41	七山東遺跡	散在地	奈良～室町	田	平地	80,000m <sup>2</sup>	古代須恵器・土師器・瓦器等検出	
42	小垣内西遺跡	集落跡	余呂～室町	宅地	平地	3,600m <sup>2</sup>	古代須恵器・土師器・瓦器等検出	
43	大久保F遺跡	集落跡	外生～室町	宅地	平地	1,436m <sup>2</sup>	石鍋・平安頃の住物等検出	

### 熊取町遺跡分布図



## 第2章 調査の概要



### 第1節 東円寺跡について

熊取町の中央部東寄りには熊取町役場や消防署、中央小学校が立地している。この役場周辺の大坂外環状170号線を挟むような形の約3,000m<sup>2</sup>が東円寺の遺跡の範囲として周知されている。

遺跡名になっている東円寺は現在存在していない。16世紀に著述されたとされる「葛城峯中記」には「野田山…」の記述が見られる。またこれまで熊取町役場周辺で実施した発掘調査では、平安時代末の所産と推測される複弁蓮華文軒丸瓦が多く発見されているので、この地にあった寺院は平安時代末頃に創建され、中世～近世を通じて存続したものの明治維新の廃仏毀釈で完全に法燈が絶えたものとされている。その時本尊であったとされる薬師如来座像が熊取町大久保の法禪寺に残されている。

江戸時代に著述された「先代考撰略」によれば、東円寺はかつて「東曜寺（トウヨウジ）」と呼称されていたとされる。その音が訛って「トヨ寺（豊寺）」や「東永寺」などの小字名になって現在残っているようである。江戸期の東円寺は真言宗末とされるが、中世の東曜寺は葛城山に展開した山岳修験道に關係する寺院ではなかったかという説もある。

中世の東曜寺は豊臣秀吉の来襲で完全に焼亡したとされるが、江戸時代に入って再建され「東円寺（トウエンジ）」と呼称されるようになったという。

現在の遺跡としての東円寺跡の範囲内においては、これまで多くの発掘調査が行われて瓦器碗を中心とする中世の遺物と掘立柱建物跡が検出されているが、肝心の寺院の推定中心地では

本調査・確認調査が行われていない。周辺地の調査で出土した複弁蓮華文軒丸瓦や均等唐草文軒平瓦は熊取町指定文化財に指定されている。

また発掘調査の成果から、熊取町野田にあったこの寺院は創建後數十年経た鎌倉時代に火災で大方の建物群が焼亡したのではないかと推測できる。中世土器の比較観察からすれば、火災が起きたのは西暦1220年から1270年の間だったのではないかと思われるが、その原因を特定するには至らない。また創建期の寺院焼亡の後は、規模を縮小してその場所で復興したものと考えられるが、寺域の大部分は農地に作り変えられたことがわかっている。周辺には引き続いて集落が営まれたようで、尾上式瓦器柵編年によるⅣ期の所産が多く検出されている。15世紀以降の遺物は極端に少なくなるが、これは寺院の繁栄の度合いや規模に比例しているものと思われる。

## 第2節 調査の契機

### 文化財保護法第57条の2 第1項

申請地：熊取町野田二丁目2328-1他6筆

工事の概要：住宅地造成

受付日：平成13年11月22日

遺跡名：東円寺跡

平成14年5月14日文化財保護法第57条の2の届出に基づいて、機械による遺跡の確認調査を実施したところ、現在のG.Lより-0.4~0.5m付近の地山黄褐色粘質土層上に柱穴を数基検出し、他に多くの中世遺物を検出した。申請者と協議したところ宅地に関しては現状G.Lよりさらに盛土を実施した上で住宅基礎工事を実施する旨を確認したため、住宅地進入道路部分のみに対して、埋蔵文化財の記録保存のための本発掘調査を実施することを決定し、協定を締結し本町教育委員会の受託事業とした。

## 第3章 東円寺跡02-2区の調査

調査期間 平成14年5月20日～6月17日

遺物包含層が過去の開発で削平されほとんど消滅し、現代の客上で遺構面が覆われている状況であったため、慎重に機械掘削によって遺構面付近まで掘削した後、人力で精査し遺構の検出に努めた。遺構検出状況を撮影し、1/20で平面を実測した後、遺構を半裁し、遺構状況を記録、完掘して遺物の検出などを行った。

なお費用面の関係で航空写真撮影は実施できず、遺構群の永久座標値は与えられていないが、周辺道路・家屋を含んだ実測を行っており、国家座標値が付与されている平成14年周辺時点での住宅・道路地図と後で照合可能なようにした。

## 第1節 屢序

海拔37.400m付近まで近年造成されたバラスが見られる。点圧された形跡がほとんどないところから最近まで付近は37.400mであったと推定される。以下に旧耕土・床土が観られ、この場

所にかつて水田が営まれていたことがわかる。この耕土は中世・近世のものではなく、近現代の所産であろう。耕土直下の海拔37.200m付近に黄褐色粘質土の地山層が広がっており、柱穴等の遺構群が検出される。この地山面は調査区全域で凸凹が無く、既に削平等の改変を経たものと考えられる。

- ①5Y 6/1 砂質土 近現代の旧耕作土
- ②10YR 6/6 粘質土 床上
- ③2.5Y 6/8 粘質土 地山（検出面）

## 第2節 遺構

### 建物SB 1～SB 4

今回のTOE02-2区の範囲内には主に4棟の掘立柱建物が確認できた。調査区の南側には個人住宅が予定される未調査地域が残り建物群の柱穴が隠れるが、02-2区での検出状況からそれぞれの棟が合併することはないものと思われる。建物を構成する柱穴の間隔はこの4棟全て約2.0～2.05m程度である。このうちSB 1とSB 2、SB 4がほぼ同時期のものと考えられ、SB 3のみが他の3棟より方向がややズレることが判った。

#### 建物SB 1

建物SB 1は調査区の東端に検出された掘立柱建物で、後述するSB 2やSB 3と方向を同一に構えている。調査区内における検出規模は東西4間、南北3間であるが、南西端部は未調査のため、本来の規模・形態は把握されていない。

SB 1の東端から2間目、北端から2～3間目に土壤SK 1が検出されている。このSK 1は南北2.3m、東西1.5mと東西に長い長方形状を呈している。SK 1の深さは約0.2m程度と均一して浅い。SK 1からは遺物は検出されていない。SK 1の埋土は明灰褐色土1層であった。SB 1とSK 1は年代の異なる遺構とも解釈できるが、西の建物SB 4にも同様の土壤SK 3が存在するなど、建物に付随する遺構と見るべきだろう。

SK 1・SK 3とも遺物がなかったため、当初は建物SB 1やSB 3が廃絶した後で掘削された墓坑等ではないかと考えたが、検出状況があまりにも建物SB 1やSB 3とうまく溶け込むように位置している。

SK 1の性格は不明ではあるが、他市町村の調査報告例を参考にすれば、中世期の便所である可能性がある。これらの長方形の土壤がそれぞれの建物と有機的に密接に関連する遺構とするならば、考えられるのは便所ではないだろうか。同時代の便所遺構の研究によれば、意外なほど土壤の深さが浅いことなど、形状が類似するようである。

建物SB 1の性格は不明である。SK 1を便所とするならば、暨でいうところの4畳分を占有しており、SB 1の検出面積の1/5程を有している。従ってSK 1全体に住空間を見出すことは難しく、また作業スペースや倉庫としての機能性にも欠けるなどの事柄が見えてくる。消去法的に考察すれば、南北に3間程の小ぶりな建物SB 1は母屋SB 2に接する便所であった可能性がある。

### **建物SB 2**

このうちSB 2は特筆すべき掘立柱建物で、その後平成14年8月と9月の二度にわたる個人住宅建設に伴う国庫補助事業の発掘調査（TOE02-3区、02-5区）においてもSB 2を構成する柱穴が多数検出され、1戸の建物を構成することが確認された。図のようにSB 2はTOE02-5区よりもさらに北側にもその範囲が及ぶことが想定されるが、東西方向には6間の規模をもっている。東面には大きな井戸SE 1（TOE02-3区内）に面している。南北方向は北側の区域外にまで広がっている可能性があり、調査の範囲内では4間にとどまっている。また南側には南北2間×東西1間の小さく細長い空間を形成する規則正しい柱穴が確認されており、SB 2を構成する柱穴群と方位・柱間が揃っているので、建物SB 2から派生する部分と考えている。（本02-2区ではこの派生部分のみが検出された。）

またSB 2の井戸に面する東面には、建物を構成する柱穴の他に、それらと平行する位置関係に南北2間、東西半間ほどの構造物を構成していたと考えられる柱穴が検出されている。これらの柱穴は井戸SE 1のちょうど正面に対しており、井戸の木を多いに利用する目的を有したと考えられる母屋SB 2と井戸SE 1を結ぶもの、SB 2への導入口に当たり、SB 2の入口（間口）を覆う屋根を支えた柱穴であったと考えられる。

以上のように、SB 2は井戸SE 1に面することから、母屋的な性格があったことが充分考えられる。SB 2の北東部、つまり井戸SE 1と直面する場所に東西3間×南北2間の空間があるが、ここは上間状になっていたことなども考えられ、そこがそのまま台所のような施設があったことも考えられる。井戸SE 1の埋土には大量の羽釜破片が含まれていたこともある程度証左となるだろう。

### **建物SB 4**

SB 4は調査区の西端で検出されている。調査区内では東西2間、南北にはTOE02-5区内に跨って3間を検出しているが、東西、南北両方向ともにまだ広がる可能性がある。

またSB 1と同様、東端線から1間目、SP81からSP82までの2間の間に長方形の土壌SK 3が検出されている。SK 3は南北2.3m、東西1.6m、深さは約0.25mで均一と、建物SB 1における土壌SK 1とはほぼ同じである。便所の可能性がある。建物SB 3自体の性格は不明である。規模としては井戸に面する建物SB 2より小さく、SB 1より大形の建物であることが予測される。

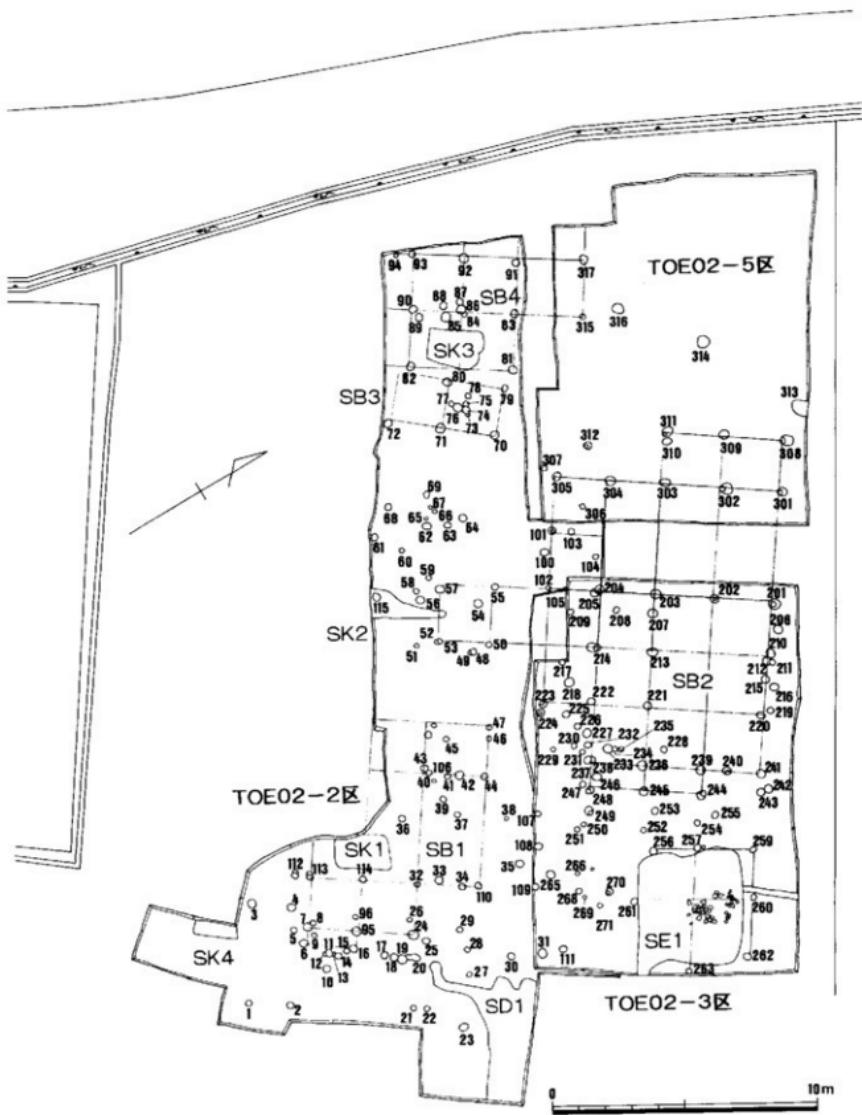
### **建物SB 3**

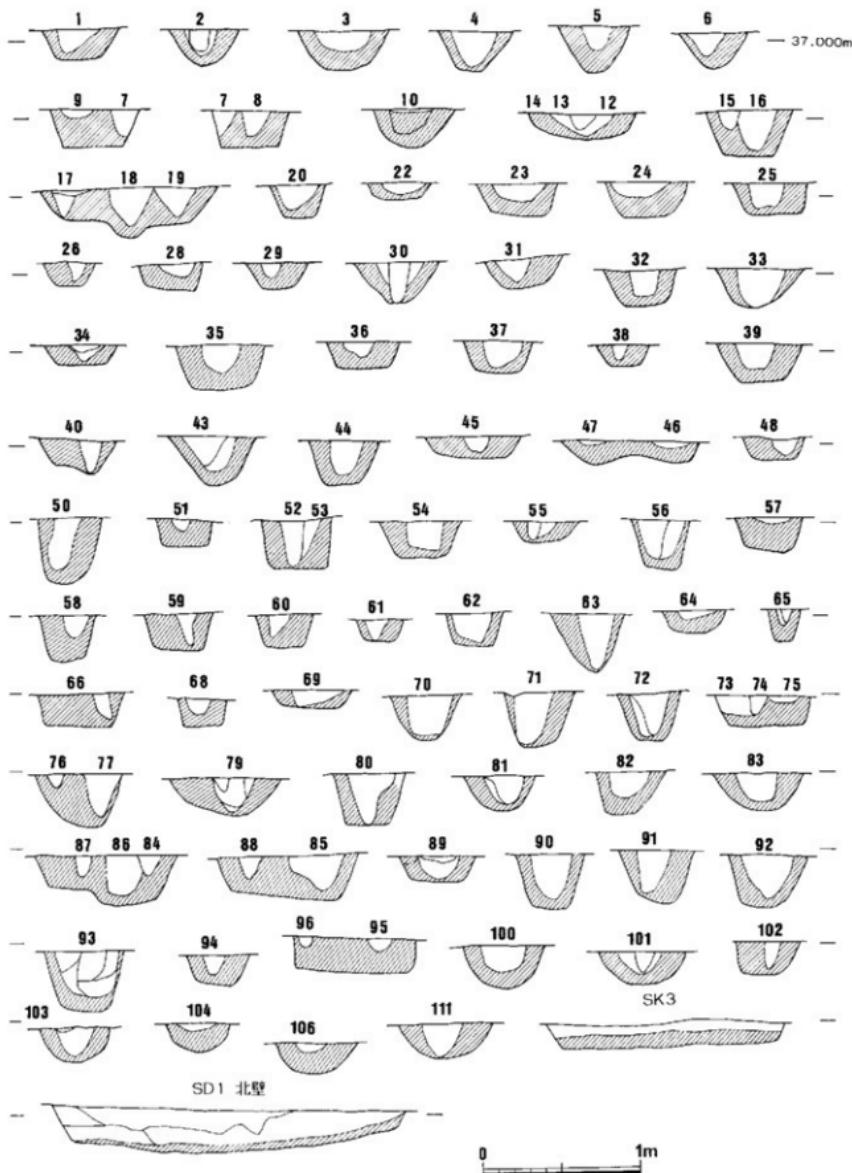
SB 3は他の3基の建物とは僅かに軸がずれている建物で、この02-2区の調査区内では東西2間であることが判明、南北方向に関しては南側方向への規模が不明のままである。

SB 3を形成する柱穴は他の3基の建物を構成する柱穴に全く劣らず堅牢なものであった。

### **溝SD 1**

調査区の東端で平面クランク状に検出された溝である。南方に細く断面もV字に近い逆台形を呈するが北側は1.5m近く急に幅広くなり底が平坦な溝となる。埋土は数層だがほぼ同一





時期の所産と考えられ、層厚約25cmの埋土中に今回の調査で検出したほとんどの遺物を包含していた。瓦器椀では尾上編年Ⅲ-2～Ⅳ-1期のものまで包含する。またSD 1の下には他の遺構ではなく、建物の柱穴と切り合わないことから、調査地点で中世建物とともに当初から存在した遺構と考えられ、まだいたいⅣ-1期直後に周囲が耕地化したのと同時に埋没したものと考えられる。02-3区の井戸状遺構SE 1とのつながりは未確認であるが必ずリンクしているものと考えられる。

#### 井戸状遺構SE 1（申請地内：国庫補助事業TOE 02-3区調査区域内で検出）

TOE 02-3区内で検出した遺構のうち井戸状の形態をもつSE 1には大きな特徴がみられた。上述の溝SD 1とSD 2が二方向から取り付く形態を見せ、井戸の周囲はおよそ一辺4mほどの正方形形状に一段掘り込まれている。その正方形の周囲には一辺につきほぼ等間隔に3本の柱穴が検出され、合計8本の柱跡が確認できた。これはSE 1の上部に屋根があったことを示すもので、柱穴の間隔は均等に約2.1mで1間である。

このSE 1は検出状況から6×4間以上の建物SB 2と密接に関連する遺構であると考えられる。

SE 1の埋土には直径約8cm程度拳大の河原石が大量に検出されており、井戸体部がこのような川原石で組まれていたと推定される。

### 第3節 遺物

瓦 器	楕440、皿19、鉢4、羽釜1、不明571	1035
中世土師器	皿107・羽釜28、不明192	327
瓦	平7、丸2	9
中世陶磁器	白磁碗1、青磁碗1、不明1	3
中世須恵器	鉢1、不明10	11
古代須恵器	蓋杯1、壺4、不明10	15
古代土師器	壺1、高杯1、不明3	5
近世陶磁器	壺1、唐津系皿2、伊万里2、不明陶器2	7
合 計		1412

\*点数は破片の状態で計算

### 遺 物

出土状態については、完形の遺物はなく、調査区の東北端部に検出した溝SD 1の埋土から大多数の遺物を検出した。SD 1からは全体の約50%に当たる711点の遺物が検出された。

柱穴の中からは瓦器・土師器の小断片が出土する例があった。調査区全体に包含層は存在していないなかったので、比較的遺物量は少ないといえるだろう。

### 瓦 器

瓦器椀については、器高が4.0～5.0cm程度で、貼り付け高台は断面が不定三角形で非常に低いものに限られる。暗文はまばらな渦巻き文で、規則性などはみられない。尾上編年による

III-2期～IV-1期頃の所産が観察される。II期以前の個体は一切観られない。

また瓦器皿は直径8.7cm大のもの、7.5cm大のものの2種類が観察される。このことからも本調査地点に検出された時期の異なるふたつの遺構の時代に瓦器椀・皿の時期がそのまま該当するものと考えている。また瓦器椀・皿には2次焼成を受けている個体が多い。

#### 甕

瓦質の大型の甕の下体部の約10cm四方の破片である。外面には黒いカーボンが残り、2ないし3方向の細かな叩き目が観られる。内面にはカーボン無く、叩きも無い。

#### 土師器

土師器は皿の他、羽釜がある。

#### 羽釜

羽釜は口縁端部が大きく外上方に反るいわゆるAタイプの羽釜であり、瓦器椀の古い形式に年代が一致するものであろう。多くがTOE02-3区に検出された井戸と考えられる遺構SE1の埋土内に検出されている。全ての個体がかなりの火熱を受けており、ほぼ赤色に変色している。また体部の破片も数多く検出されており、羽釜を井戸枠に用いたものではないと考えられる。

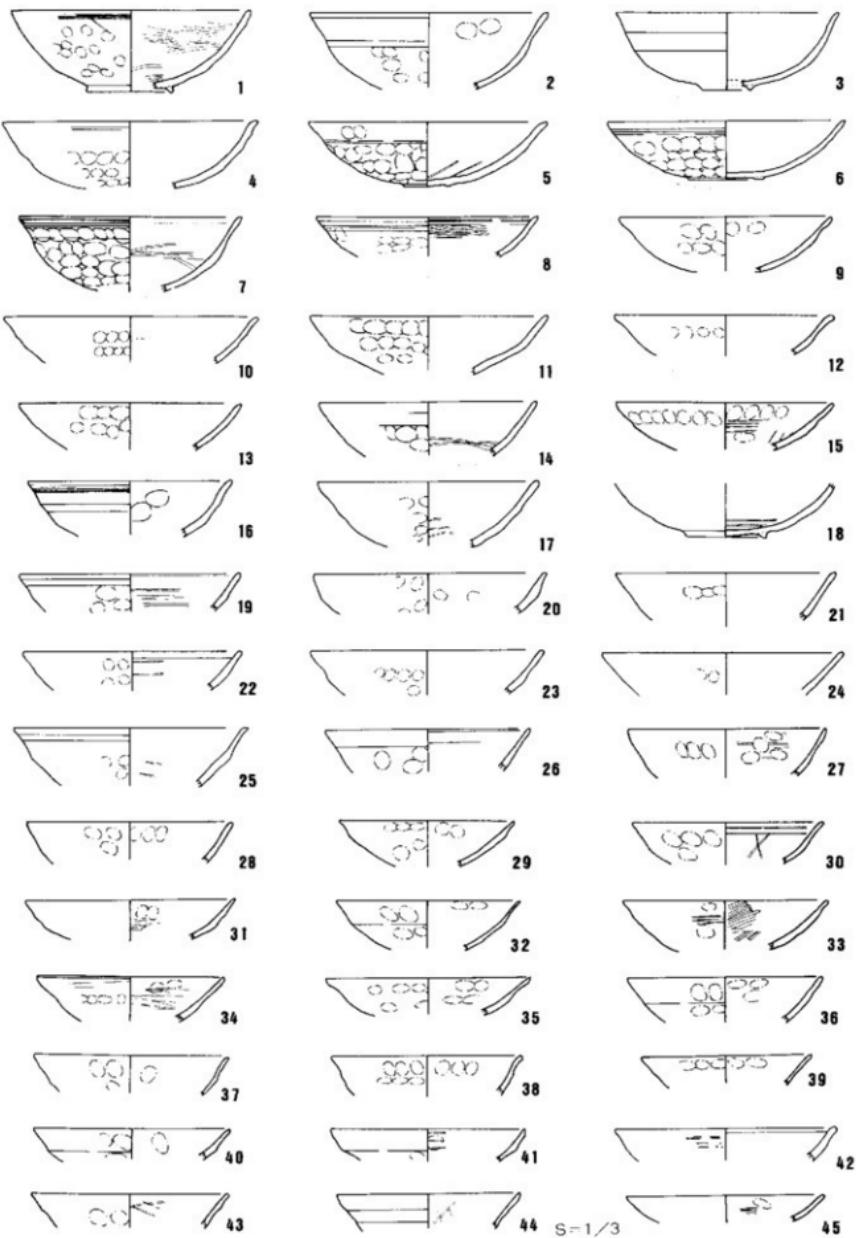
#### 瓦

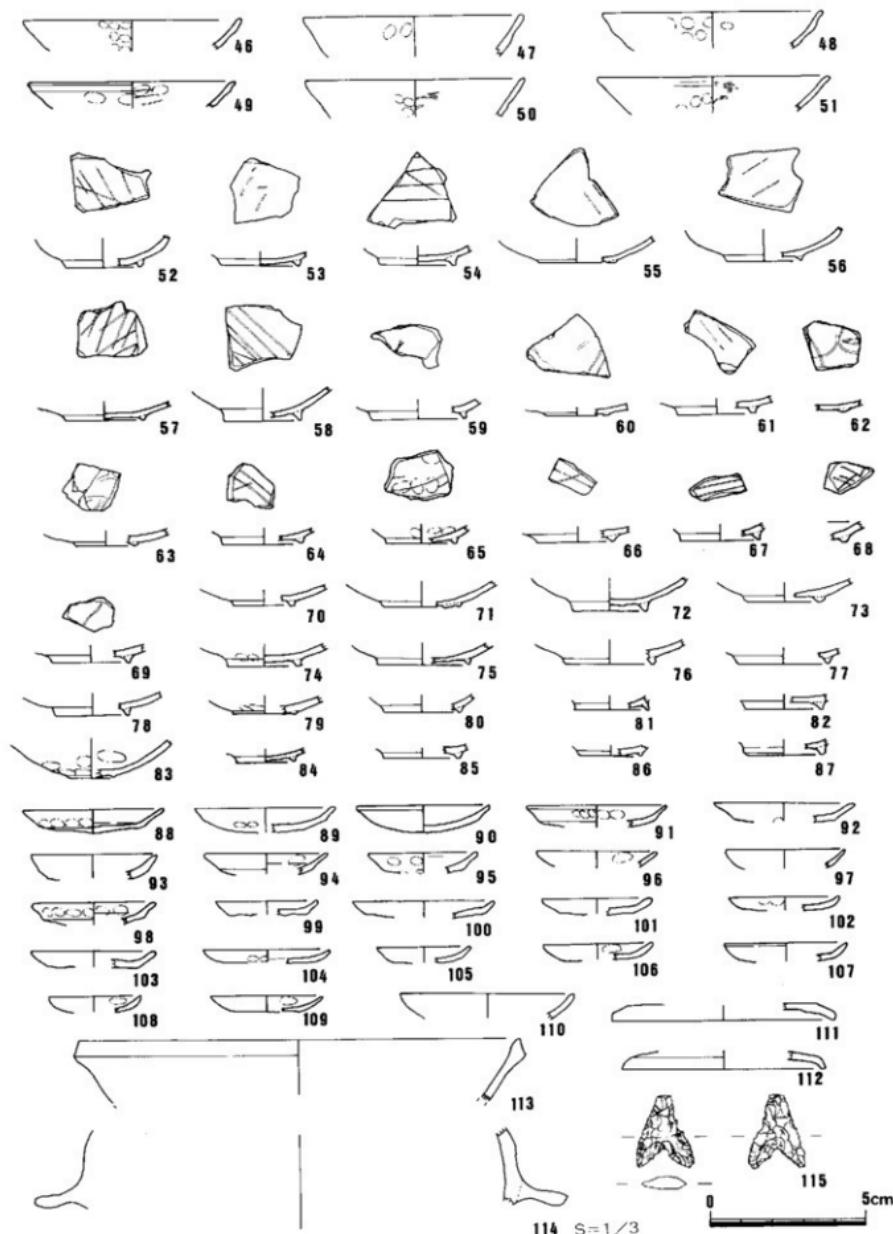
多くの平瓦は約5cm四方の破片になってしまっている。厚さは約2.3～2.6cm程度と分厚く、上面に布目痕が明瞭である。ひとつは、厚さ1.7cm、上下面とも黒色で上面端部は面取りされている。これは土壤SK3からの出土で、SK3が建物群を構成する柱穴のひとつであるSP115を切っていることから、瓦器椀など一連の遺物よりも新しい遺物であることがわかり、およそ15世紀代程度と考えられる。他の平・丸瓦の年代については、旧東円寺創建当初からの個体を多く含んでいると考えられる。多くが2次焼成を受けている点は従来からの調査結果に符合している。軒丸・軒平瓦は検出していない。

#### 陶磁器

白磁の碗が1破片分出土している。1cm<sup>2</sup>程度の小破片のため敢えて実測していないが、肉厚な玉縁が特徴で、口縁が開き、口径広く。「太宰府条坊跡XV」における白磁碗Ⅳ類-2であると思われる。大宰府土器形式のⅤ期頃で12世紀後半の年代が考えられる。

同安窯系青磁皿がある。青磁皿の中で最も扁平で、釉薬は緑というよりは青味がかり、外面底部は露胎、内面見込みに体部屈曲による段差が巡り、口縁は外反している。残念ながら約2.5cm四方の破片のため（残存10%程度）、内面には文様が見当たらない。或いは特徴的な櫛目文が施されていた可能性がある。「太宰府条坊跡XV」における同安窯系青磁皿I-1aもしくはI-1bと考えられ、磁器区分でD期、大宰府土器形式XIV～XV期で12世紀中～後半の年代が与えられている。





## 第4章 まとめ

### 調査結果

#### ●建物SB 1～SB 4について

今回の調査で検出された建物は、平成14年度国庫補助事業で発掘調査を実施したTOE02-3区とTOE02-5区の3つの調査区に跨って検出した建物SB 2を含めて4棟であるが、このうち建物SB 2は東側に井戸と考えられるSE 1を構えた本格的な建物であることが確認できている。このSB 2は井戸SE 1とは密接に関連する建物であると考えられ、SB 2を含む広大な屋敷地の一角にあって井戸SE 1を頻繁に利用できる建物（台所など）、母屋であった可能性が高い。間取りは前項で記したように6×4間以上と考えられる。

また遺構のところでも触れたが、建物群はその方向性からSB 1, 2, 4とSB 3とに分かれるものと考えられ、とりもなおさず年代の相違を示すものと考えられる。どちらのグループが前後するのかは目下検討中である。ただしこの2つの建物のグループについては、出土した瓦器椀における尾上編年Ⅲ-2～3期とⅣ-1期頃との分類に符号するものと考えられるのではないだろうか。

#### ●柱穴群

今回の宅地造成段階での02-2区の調査では柱穴115基を検出したが、さらに個人住宅2件の新築工事に伴って実施した02-3区と02-5区の調査で68基と18基を確認し、合わせると201基もの柱穴が検出された。いずれの柱穴も中世の所産と考えられたが、それらのうち復元することができた建物4棟（SB 1～4）を構成する柱穴は約70基で、残りの約130基については平面上全く所處が不明の状態である。中には杭のような役割をもつものもあるであろうが、今後の研究で別の中世の建物が発見されたり、先述の4棟の建物の複雑な平面を構成する柱だったことが判明すればと期待している。

#### ●昭和62年度TOE87-1区の調査（参考）

昭和62年度には今回の調査地点のすぐ東側の住宅開発で、13～14世紀の中世集落の一部が検出されている。昭和62年度の調査における注目点は、4棟検出された建物のうち1棟（建物12）が他の建物よりも複雑な遺構で検出されたことであり、この野田地区の13～14世紀代の村落の盟主的な建物であったものとの研究がなされている。

またこの87-1区で検出された他の3棟の建物は奈良時代の建物であるとの報告がされている。今回の02-2区では古代の土師器壺の口縁破片や須恵器蓋破片が出土しており、87-1区と照合できるものであろう。

#### ●生活面について

今回のTOE02-2区の調査、或いはその後に国庫補助事業で実施した調査で検出された同時期の建物遺構SB 1～SB 4は今後熊取の中世史を研究する上で重要な資料となるだろう。建物固有の性格（機能）については、おおまかに掴むことが可能であるが、残念ながら今回のTOE02-2区の調査区域全体は現在に至るまでに大幅な整地・造成等を受けて完全に削平されており、検出面として当時の生活面を検出することはできなかった。遺物に二次焼成を受けた赤褐色の個体が散見されることから建物群はおそらく火災で焼失した筈だが、削平によって建物SB 1～SB 3の詳

細な遺構は葬り去られてしまっていた。本来ならば各柱穴の間に存在していたであろう建材の痕跡や建物の床材などの炭化した痕跡が残っていた筈であるが、それらを辿ることは叶わなかった。

#### ●遺物

溝SD 1からの遺物数が大多数を占め、尾上編年Ⅲ-2～Ⅳ-1期の瓦器椀を中心に、白磁、青磁の破片、土師質の羽釜A、そして旧東円寺に使用されていたと考えられる瓦破片というセットの出土は、これまでの東円寺跡における調査成果と完全に一致する成果である。瓦器椀に様式上の隔たりがある以上、埴物群を含む集落の存続年数に幅が存在することが考えられるが、過去の調査成果と照らして、これまでいわれてきている旧東円寺瓦のみが12世紀後半の平安時代の所産であるということとは不合理が生じるものである。最も古い様式として周辺で検出される尾上編年Ⅲ-2期に相当する多数の瓦器椀こそが、旧東円寺の創建期に用いられた上器と考えられるのである。Ⅲ-2期は単純に13世紀前半代と想定されているが、従来からの東円寺創建平安末期説とはおよそ30～50年近いズレが生じてしまっている。平安と鎌倉という時代の相違（古代寺院か中世寺院か）という大きな問題が存在する悩ましい部分である。

#### 調査より推測されるもの

##### ●間取りによる建物の分類

野田地区周辺の東円寺跡内でのこれまでの調査で検出された掘立柱建物のデータを分析すると、中世建物のうち母屋など居住可能な空間としての建物が5×3間の平面形態からなっており、最も多い3×2間の間取りの建物は倉庫的なものと考えられる。他には4×4間、5×4間などやや複雑な建物が僅かに検出されている。従って今回のTOE02-2区の調査で検出された多数の柱穴群も、これら中世の熊取の建物の間取りを踏襲しているものと考え、02-2区では4棟すべての建物が部分的な検出となり、全体的な規模を検出できなかったが、その復元の基礎資料として活用できるだろう。

##### ●瓦

今回検出された瓦破片は合計9片だった。これは周辺地での調査と照合すれば平均的ともいえるが、昭和60年頃に旧東円寺の推定中心地付近で実施した調査では溝の中から大量の瓦破片が検出されており、今回の02-2区とはその数量に大きな開きがある。従って今回の02-2区には少なくとも寺院を構成する瓦葺の建物は存在していないかったものと考えるべきであろう。4棟検出された建物が寺院に関係があったのかどうかは今後の課題である。

##### ●井戸SE 1と溝SD 1について

遺構の項で述べたが、このSE 1は2本の溝SD 1、SD 2と結びついている。井戸SE 1から水を汲み上げて、溝SD 1に流し込んだとは考えにくく、逆に溝SD 1で集積した雨水をSE 1へ導いて利用しようとした施設が考えられる。

ア. もともと湧水のある井戸にさらに雨水を流しこんで少しでも水を溜めようとしていたもの。

イ. 井戸を掘ったものの、湧水量が少ないかまたはすぐに枯れてしまったので、雨水を溜める施設に転用したもの。

ウ、あるいは井戸を掘ったところで湧水が見込めないので、最初から雨水を溜める目的で井戸と同様の形態で掘削された水溜用の特殊な施設。

このうちウであるならば、熊取など雨の少ない地方独特の遺構といえるものである。熊取をはじめとする泉南地域は降雨量が少なく、室町時代末期から江戸時代を通じてたくさんの溜池が造られたことで知られる地域である。熊取町には雨山という山があり、雨乞いの「雨山踊」があったことなどから、この地域の人々は水を非常に大切にする習慣があったことは確かである。最も雨水を集めるために適していたと思われるは建物の屋根をつた落ちる雨水を利用することで、建物の軒下に溝を掘って流し、一ヵ所に集めるように井戸状の土壙を造ったことなどが考えられる。

#### ●溝SD 1

調査区の北東端で検出された平面クランク状の溝で、断面はV字状を呈し、検出面からは約30cmの深さを測る。クランク状に曲がっているためどういう方向性があるのかは不明であったが、調査区の北壁の東端から出てくるように検出され、約5mほど南西方向に幅員を狭めながら続いた後で突然途切れている。この溝の中には瓦器椀の破片など13世紀後半～14世紀前半の遺物が多く含まれている。この溝がどのような機能をもって開削されたのかは不明であったが、平成14年7月30日から実施した今回の宅地開発の申請地内における個人住宅開発に伴う国庫補助事業の発掘調査TOE02-3区で、規模の大きな井戸SE1が検出でき、その井戸端から2本の溝が北方向と東方向に掘削されていることも確認できた。このうち東方向に伸びる溝SD1が今回の溝SD1に直接繋がるものと考えられる。従ってこの溝SD1は井戸SE1に連結しながら、雨水もしくは井戸水を通す機能を担っていたものと考えられる。しかしながら13世紀当時の井戸は明らかに縄を結わえた桶を駆使して人力で井戸水を掬い上げる井戸であることから、せっかく汲み上げた井戸水を建物の周囲に掘った溝に流すとも考えにくい。とすれば建物の屋根などを伝った雨水を雨落ち溝を通して流し、井戸に流し込んでいたのであろうか。現在の情景からすると衛生面からしても理解し難いものであるが、雨水を集積し、井戸の中でろ過して飲み水としていたのだろうか。或いは熊取には溜池が多いことで有名であるが、このことからもわかるように、湧き水など地下水が非常に少ない地域のいわば生活上の知恵なのかもしれない。

#### 野田をめぐる熊取の歴史

現在熊取町役場・消防署・図書館等主要な公共機関は野田に集中している。野田には東円寺跡という非常に大きな範囲を有する遺跡があるが、この遺跡からは縄文時代早期の有舌尖頭器や後期の石器が出土することから、古くからなんらかの営みがあったことが伺える。残念ながら縄文時代の住居址などの遺構は検出されていない。また野田では弥生時代～古墳時代の遺構・遺物も見つかっていない。野田ではっきりとした遺構と遺物が検出されるようになるのは奈良時代からで、役場前の開発時に同時代の建物跡や土師器が出土している。奈良時代の遺物は熊取町内の各所における発掘調査で検出されるようになってきており、それらの地域と同様に野田でも開発が始まったものと考えられる。或いは墾田永年私財法等によって熊取は開発されていったのかもしれない

い。発掘調査では奈良時代の短期間の営みが検出されるもののその後の平安時代の遺構・遺物は駅前の大久保付近を除いてほとんど検出されなくなる。或いは政策によって開かれた耕田は奈良から京都への遷都、朝廷の衰退、私的勢力の台頭などの社会背景とともに荒廃してしまっていたのかもしれない。

奈良時代以降野田ではおよそ400年間の埋蔵文化財のブランクがあり、平安時代末期頃に突如として寺院（東円寺）が建立される。荒れ果てていたと考えられる野田周辺にどのようにして寺院が建立されたのだろうか。寺院を営むだけの私的な勢力地盤が平安時代を通して野田周辺に成長していなかったとしたら、この寺院を開いたのは誰なのだろうか。

発掘調査の成果からは、東円寺とその周辺地に展開した集落とは非常に密接な関連にあったものと考えられる。また鎌倉時代になって野田で始まった人々の集落・生活はその後現在に至るまで脈々と営まれ続けることもおおまかではあるが伺える。となると現在の熊取町の人々の祖先は平安時代の末に突如どこか他の場所からやってきて、荒廃していた熊取を開拓し、野田に寺院を開いたのだろうか。否或いは熊取に寺院が建立されることによって、人々が熊取に集まるようになったのかもしれない。

発掘調査の蓄積で、野田に建立されたばかりの寺院はおそらく鎌倉時代が明けないうちに火災に遭って大部分が焼失してしまったことがわかっている。野田の寺院はかなり規模を小さくしながら再興されたが、求心力は失ってしまっていたのかもしれない。

熊取町の遺跡のほとんど全てが鎌倉時代以降の遺跡で、14世紀には町南部の山岳地域に雨山城が築かれたり、幾たびも戦場となるなど熊取の支配もめまぐるしく移り変わっていた。

熊取のある大阪府の南部は高野山や葛城山があるなど山岳修験とは非常に密接につながっている。熊取町の周辺地にも修験に始まる寺院が存在している。平安時代末期には末法思想の中、非常に修験が大流行した時代で、紀伊半島南部の那智・熊野に詣でる熊野詣も盛んに行われた。熊取付近には熊野古道のひとつが通っていたとされる。熊取に道場のひとつが設置されていたことも考えられる。江戸期に編集されたとされる修験道記「葛城峯中記」の中に「野田山」と呼ばれる寺院が見られ、旧東円寺と考えられている。

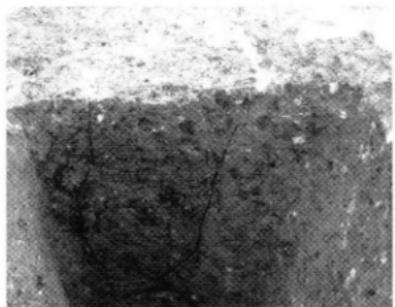


東円寺跡02-2区 調査区全景

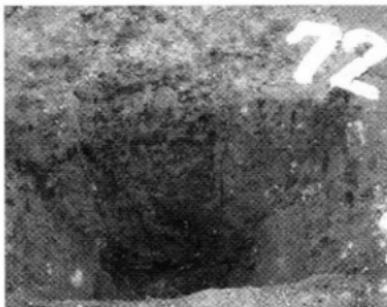


東円寺跡02-2区 調査区壁面

写真図版二



S P 50



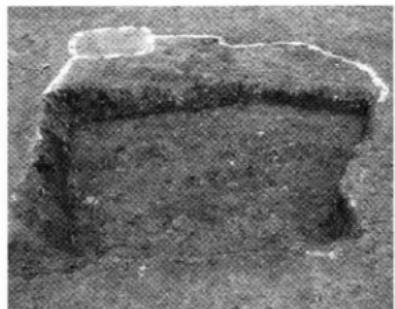
S P 72



S K 2

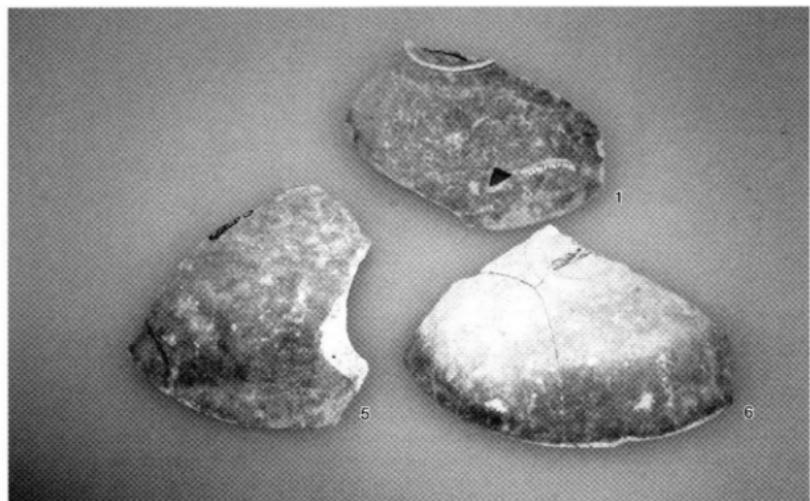


S D 1

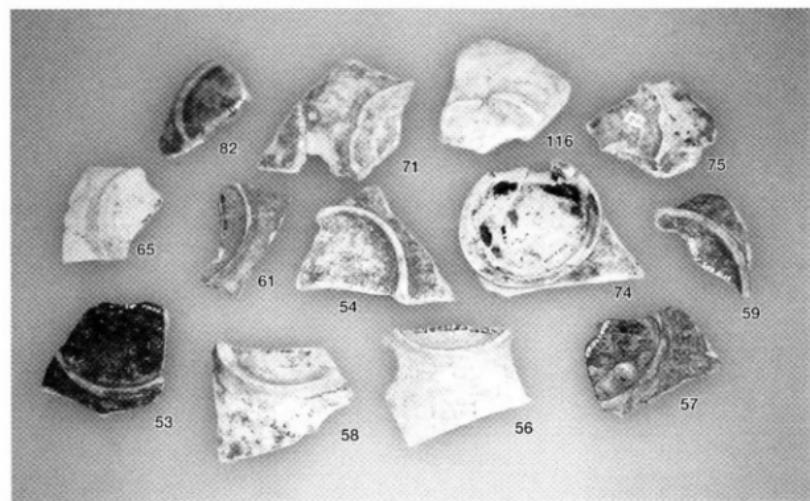


S K 3

写真図版三



遺物

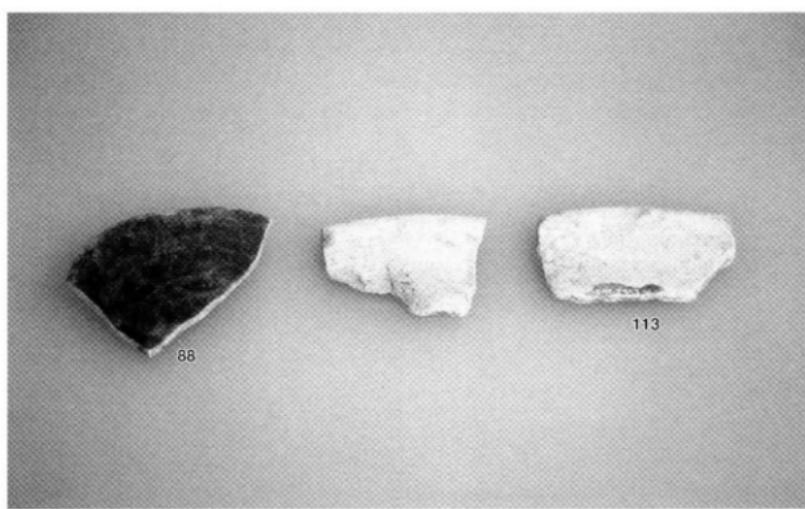


遺物



115

遺物



88

113

遺物

# 報告書抄録

ふりがな	とうえんじあとはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	東円寺跡発掘調査概要報告書							
卷次	XI (11)							
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第42集							
編著者名	前川 淳							
編集機関	熊取町教育委員会							
所在地	〒590-0495 大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号							
発行年月日	西暦 2003年3月							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうえんじあとはくつちょうさがいようほうこくしょ 東円寺跡 02-2区	おむさかふせんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうのむだ 熊取町野田	27361	6	34° 23' 53"	135° 21' 22"	20020514 20020607	340.15	分譲住宅地 の造成
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東円寺跡 02-2区		純文～江戸時代	建物4棟・壁・溝・土塁	瓦器・中世土師器・須恵器 瓦・白磁・石鏡	13～14世紀の建物群			

熊取町埋蔵文化財調査報告 第42集

東円寺跡発掘調査概要報告書・XI

発行日 平成15年3月

発行・編集 熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町野田一丁目1番1号

印刷 小笠原印刷（株）

大阪府泉佐野市上瓦屋646番地